

銀河鉄道の夜

走りし夜
2のほろりといふ
銀河鉄道の夜

「みなさんは、おのほろりといふ乳の流るるを
銀河が何かで承知
ですか。先生は、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」

「みなさんは、おのほろりといふ乳の流るるを
銀河が何かで承知
ですか。先生は、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」
「カハネルが手とあげました。それから四五人手とあげ
ました。ジョバンニも手とあげやうとして、名をいふその
まゝやめました。たしかにあれがみんな目生をど、いつか
誰かで、夢をのびしたたが、このころはジョバンニは
まるで毎日、教室でもねむく、本で寝てしまふ
やうな本もないので、こんなことをいふのは、
なんたか

こんなこともほろりとなりよくわからないといふ気持ち
つかまるのでした。

ところが先生はよくもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたを知りてわかつてゐるのひせし。

ジョバンニは、まかよくまぢあかりましたが、まづてみると

も、はつきりとそれを見附けることが、まづてみると

ないのでした。おのほろりといふ乳の流るるを、
銀河が何かで承知
ですか。先生は、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」

ふりかへて、ジョバンニを見てくすくすとゆらゆら
ひきました。ジョバンニはもうとて、まづてみると

しまひました。先生は、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」

「銀河を、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」

よく聞くと、銀河は大体何とせし。

大きな

「みなさんは、おのほろりといふ乳の流るるを
銀河が何かで承知
ですか。先生は、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」

こんなこともすくはるるを、
銀河が何かで承知
ですか。先生は、
黒板に、
白くけぶつた雲のやうなところを
描きなから、みんな
2問をかけました。」

ち時かゝるまゝに。おしよるまはあかしてしはらく
 たつたころ、ひるばんは拾った紙と云ふに、いかにいれ
 ず、いかにともし、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 から、いかにともし、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 然つて、それと云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 ひるばんはあかしてと云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 のころに、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 やつぱり、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 た、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 おい、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 信じて、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 吹き、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ

角の紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ

青木大学士が、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ
 青木大学士が、いかに紙と云ふに、いかに紙と云ふに、いかにいれ

つたうかぬえ。

つしまに毎朝新聞をまはしに行くと、これと①いつても

お中まわしんとてゐるからさ。お中

つたはすのいからぬえ。

つやうからエルといふ犬があるよ。しつぽかまゆるつ

いやのやうだ。おくか行くとお果を喰らしてついでく

ま。お中うつとすの角までついでくる。まうとついで

くることあるよ。しつぽはみんなお中風をあや

かお中えもつ川へまかしに行くんたつて。きつと

たまつて行くよ。

つやうだ。今夜は飯のあぬるぬえ。

つたえん。ほく牛をとりあひらんとくるよ。

つた、行くおいで。

つ川へははいらないわね。

つあ、ほく山ばかり見えるだけなんだ。一時も

つて行くてくるよ。

つまうと遊んでおいで。カムパニうさんと一歩ならん張

はないから。

つあ、まうと一歩がよ。しつぽはあやパンスのけ

つては附けると

つたよくつて

つはい

つあは「お中半」でいってくるよ。とていふから

つあは「お中半」でいってくるよ。とていふから

鳥島あかしに行くの。

「ガネリ、やへへ行つたの。」 ジョバンニが半分さびかけ
たとき、もうまゐでかきぬけに、うしろの坂のさびき
の槽めをかめ、その子が投げつけるやうに叫んでおまし
た。 ジョバンニ、お父さんから、いつこの上着が来る
よ。

ジョバンニは、ぱつと腹がつめなくなり、そこから中き
いんと鳴るやうに思ひました。

たがなりのジョバンニのお父さんは、やんをわうとや海
豹をとる空船に乗つておて、それになにかひと怪
愼させたために、遠くのさびしい海峡の所の監獄に入つて
ゐるといふのでした。お父さんから今夜をみて、みんなが町の
廣場にあつまつて、一語に星めくりの歌をうたつたり、

川へ青い鳥のあかしを流したりするたのしいケンタウ
ル祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふかへ着のま
まで、病氣のあつかさんの牛乳の配られて来た。いのちを
に、下の町はぐれまゝ行くのをした。

（ガネリは、どうしてぼくがなんにもしないのに、あ
んなことをさぶのあらう。ぼくのお父さんは、ゆるくて
監獄にはいつてゐるのではない。ゆるいことなど、お
父さんがする筈はないんだ。去年の夏、帰つて来たとき、
たつて、~~さぶ~~と見たときはびつくりしたけれども、
ほんたうはここにゐらうて、それにあの荷物を解いた
とき、なぬこうだ、鮭の皮でさえた大きな靴の、とど
かひの角の、とどんなにぼくは、はねあがつて、

何だ、いじとどどハニはよくおぼろーまゐるん

氣は澄みきつて、まるで水のやうに通りや店の中を流れ
まじり、街燈はみなまっ青なまみや櫓の枝で包まれ、
電氣會社の前の六本のプラタナスの木などは、中に沢山
の豆電燈がついて、ほんたうに人魚の都のやうに見
えるのでした。子どもらは、みんな新らしい靴のついた
着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走ったり、青い
マグネシヤの花火を燃したりして、夜のしさに遊んでゐ
るのふした。けれどもジヨバンニは、いつかまた深く首
を垂れ、^{て、そのうちに} ^{まゐるで} ^{ちかつたことを考へ} ^{断はぐれ}
へ、^{牛乳屋の方へ}

お母さんは、ほんたうにきのどくだ。毎日あれ

（キヤバヤの草をどつたり）

配して、それでも無理に外へ出て、燕麥をかつたりはた
らい方のだ。あの晩、あつかさんは、あまり動悸がす
るからジヨバンニ、起きてお湯をわかしてお呉れと云つ
てぼくをおこした。あつかさんが、ぼんやり辛さうに息
を吐いて、唇のいろまで変つてゐたんだ。ぼくはたつたみ
とり、まるで馬鹿のやうに火を吹まけて、お湯をわか
し、^し ^手 ^を ^あ ^た ^た ^め ^て ^あ ^げ ^を ^り、^胸 ^の ^温 ^布 ^を ^し ^た ^り、
頭を冷したり、いろいろしても、あつかさんは元々
さういふといふきりをつた。ぼくはどんなに
つらかつたかわからない。
ジヨバンニは、いつか

(19)

「ジョバンニが面白くてかけるのをとめて、ゆあいとせ
みまし方。」「どんだん」ジョバンニは走りまわった。

けれどもジョバンニは、まっすぐに坂をのぼって、木
の梢の中へあがさんの家へは帰らないで、ちやう
どその山の頂はづれへ走って行つたのです。そこには河
原のぼうつと白く見える、小さな川があつて、細い鍬の欄
干のついた橋がかかつてゐました。

「ぼくはどこへもあそびに行くとこがない。」「ぼく
はみんなから、まるつちのやうに見えるんだ。」「
ジョバンニは橋の上でとまって、ちよつとの間、
せわしい鬼がきれきれに口笛
を吹く。」「立つてゐましたか。」「俄かにまたちからいつぱい

走りだしました。


そりからぬやうのおとこはさびしうなうたを
けかあちやうどいふ方へきかいて。

天氣輪の柱

川のほとりには、ゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、此の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く輝いて見えまして。

ジヨバンニは、もう露の降りかかつた小さな林のすみちを、どんどんのぼつて行きました。まつくらの草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしたまゝであつたのです。草の中には、ぴかぴか青ひかりを出す小さな虫が、~~かたは~~もゐて、~~その~~葉はすかし出され、ジヨバンニは、さつきみんなの持つて行つた鳥かのおかぬのやうなとも思ひました。

そのまっ黒な松や榎の林を越えようと、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の、天氣輪の柱も見えられたのでした。つりがねさうか野ざくかの花が、そこでいちめん、夢の中からでも葉りかしたといふやうに咲き、鳥が一足、丘の上を鳴き響けながら通つて行きました。

ジヨバンニは、頂の天氣輪の柱の下に來て、どこかかするからたを、つめた草に投げました。

町の灯は、暗の中でもまるで海の底のお宮のけしきのやうにとり、子供らの歌ふ聲や口笛、きれぎれの叫び聲もかすかに聞えて來るのでした。風が遠くで鳴り、丘の

草もしづかにうまき、ジヨバンニの汗でぬれたシャツも
つめたく冷まれまじや。ヨリノ木はじやと天の川を
ながれ来る人まじや。     

ぼくはもう、遠くへ行つてしまひたい。みんなかれ
はなれて、どこまでもどこまでも、行つてしまひたい。う
れでも、もしカムパネルラが、ぼくといつても来てく
れたら、そして二人で野原やたまごまの家をスケッチし
ながら、どこまでもどこまでも行くのなら、どんなにい
いからう。カムパネルラは決してぼくを怒つておないの
だ。そしてぼくは、どんなに友だちがほしいだらう。ぼ
くはもう、カムパネルラが、ぼんたうにぼくの友だちにな
つて、決してうやまつかないなら、ぼくは命でもやつて

もいい。けれどもさう云はうと思つても、いまはぼくは
それとかムパネルラに云へなくなつてしまつた。一語に
遊びひまがなくなつた。ぼくはもう、空の遠くの遠く
の方へ、左の一人、右の一人で行つてしまひたい。

カミパネルラから汽車の音が聞えまじや。その小さな列車の突
は一列の小さな赤い見え、その中にはたまたまの旅人が、
苹果を割いたり、ゆらつたり、いろいろな風にしてゐる
と考へますと、ジヨバンニはもう何とも云へずかなしく
なつて、また眼をうらに擦りました。あの青い壁の屋上
の葎のやうに脚が長くなつて、まっけも四つにわかれ
ちやうどけしきつたのでした。

カムパネルラとたつた二人、まっすぐにあの天の川の

27 21/2

りやうは、その青い髪を束ねて、
 とどろがいくら見てゐても、
 うな、がらんとした、冷いところとは思はれませんでした。
 を、それどころなく見れば見るほど、そこは山さな木
 や牧場や河ある野原のやうで、冬へ入れては方なかつたの
 りす。そして、ジョバンニは、^まい、^きの星が、^まの二つは、
 四つにもなつて、ちんちん、^ま、^きが何べんも出たり、
 つひにかりして、^ま、^きのやうに長く、^ま、^きの
 見ました。^ま、^きのまぢかりが、^ま、^きのやうに
 ほんやりして、^ま、^きのまぢかりが、^ま、^きのやうに
 か一つの大きなけかりか、^ま、^きのやうに、^ま、^きのやうに
 思ひます。

そいつを^{銀河ステーション}の天幕の程がどうか
とわづかきもたやうとあんまりなすつた

ジョバンニは、かう呟くか呟かないうちに、
とほ、~~いまだ~~ぼんやりと夢のかたちをみてゐた、やの
青いあじむかりが、にはかにけつきりした三角標の形に
なつて、しばらく雲のやうに、ぺかぺか消えたりともつ
たりしてゐるのを、たうたうりんとうごかないやうに
なりつゝ、濃い銅青のやらの野原にたちました。いま
新らしく灼けたばかりの青い銅の板のやうな、さらの野
原に、まっすぐにすきつと立つたのです。

(いふなんでも、あんまりひどい。ひかりが、あんなに
ヨコレートでも組みあげたやうな三角標になるなんて、)
ジョバンニは、思はず誰へともなしにさう叫びました。
とするとさやうと、それに返事をするやうに、とてか遠
くの遠くのものの中から、セロのやうなさうさうした聲
がきこえて來ました。

(ひかりといふものは、ひとつのエネルギーだ。あ
菓子や三角標も、みんないろいろに組みあげられたエネ
ルギーが、またいろいろに組みあげられてゐてゐる。
をから規則さへさうならば、ひかりが、あ菓子になること
もあるのだ。たゞあまへは、いままでうんな規則のこ
に居なかつたをけた。ここらはまるで約束がちがふから
な。)

すると二かた

ギョバンニは、ゆかりをやらな、ゆかりないやうな、
あかした氣がしてだまつてさういふを覚えてました。

するやとんでは、前からなまう一ろからたもとどから
ふもなふしきた聲が、銀河ステーション、銀河ステ
ーションときこえます。やうて、まふいふあかししてと
は、その詩がゆしきギョバンニの知らない詩なので、その
はせやんとゆかるといふた。ふふふかーとふふと

「さうだ。やうばりあれば、ほんたうの三角標を、頂
上には、白鳥の形を描いた測量旗をうてひらひらしてめ
る。」ギョバンニがさう思つたときでした。いきなり眼
の前が、ぱつと明るくなって、まるで億萬の螢鳥賊の火
をーぺんに化石させて、その中に決めたとはいふ命令、ま

たダイアモンド會社で、ねえんがやすくならないために、
ゆかりと積れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰
かがいきなりひっくりかへして、ばら撒いたといふ風に
眼の前がさあつと明るくなって、ギョバンニは思はず何
べんも眼を擦ってしまひました。實にその光は、燦々ニ
本の帯になつて、とろろとろろ枝を出したり、三の枝
れたりしながら、空の野原を北から南へ、上から下まで
れるのでした。

（あの光る砂利の上には、水が流れてゐるやうだ。）
ギョバンニは、ちやうどさう思ひました。するとさういふ
あのちやうどさうな聲がきこえたのです。
（水が流れてゐる？）水かぬ、ほんたうに

時きました。けれど僕はいまうと前から、ささるぬ
かいておろのてはなかつたうか。よくはした、こん
な野原を歩いて来たのではない。途中のふとまた入す
うとしまふ、なんにもないんをわら。ところがふと気が
ついてみると、さっきから、ふとふとふとふと、ジヨバ
ンニの乗つてゐる小さな列車が走りつづけておろのてし
た。ほんたうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな
黄いろの電燈のなめんが車室に、窓から外を見ながら座
つてゐたのです。車室の中は、青い天幕を張つた棚掛
けがまるでがら明きで、ほんの木と木の、ササヤや風の
ゆるい着物を着た人たちが、眼鏡を直したり、何か本を
讀んだりしてゐるだけ、何ふの角いろのワニスも塗つた
壁には、真鍮の大きなぼんが二つ光つてゐるのです。
なまが、ジヨバンニは、眼鏡を直したり、何か本を
讀んだりしてゐるだけ、何ふの角いろのワニスも塗つた
壁には、真鍮の大きなぼんが二つ光つてゐるのです。
せいの高い子供が、窓から頭（めづたやうに）を出して
外を見てゐるのに気が付きました。そしてそのこめもの
肩のあたりが、どうも見たことあるやうな気が
して、さう思ふと、もうどうしてもしなにかわたり、た
く、涙が来るく、たまりなくなりました。いきなり
こつちも窓から顔を出さうとしたとき、俄かにその
子供が頭を引ひめて、こつちを見ました。
それは、カムパネルラの方です。
「あ、さうか。カムパネルラ。よくはカムパネルラ」



「ジョバンニは、一生けん命延びあがって、その天の川の
水を、見ぎはめやうとしました。どうしてもそれが
はつきりしませんでした。けれども、いんぶんよくつづ
くも、ぼくには水がなれでかよくわかない。け
れども、たしかにながれてゐる。そしてまるで風と區別さ
れないやうにも見える。あんなにすきとほって、それに
軽さうなから。」「ジョバンニはひとりで泣きました。
すると、どこかあううと遠くで、なにかが大へんよろ
こんで、手を拍つたやうなやさを氣がしました。

見ると、いまはもう、そのきれいな水は、かうスー
も水素よりすすきとほって、ときどき眼の加減が、ちらち
ら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のやうにきらりと
光つたりしながら、聲もなくどんどん流れて行き、野原
にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくし
鬱く立つてゐるのです。遠いものは小さく、近いものは
大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いもの
は青白くしかすんで、或ひは三角形、或ひは四辺形、
あるひは星や鎖の形、さまざまにならんで、野原いつぱ
い光つてゐるのです。ジョバンニは、まるでどこまでも
して、頭をよけに振りました。すると、ほんたうに、その
きれいな野原中の青や橙や、いろいろかいやく三角標ま
で、てんで息をつくやうに、ちらちらゆれたり顫へたりし
ました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に來た。」「ジョバンニは

ておました。

「ぼく飛び下りて、あいつをとって、また飛ぶ乗ってみせやうか。ジヨバンニは胸を躍らせておひました。

「もうおめだ。あんなにうしろへ行ってしまう方から。」
カムパネルラが、さう云ってしまふかしまはないうち、次のりんかうの花が、いつぱいにたつて過ちて行きました。

と思つたら、もう次から次から、方ぐさんのきいろな庭をもつたりんかうの花のコップが、湯くやうに、雨のやうに、眼の前を通り、~~流れて~~三角標の列は、~~けえる~~やうに燃えるやうに、いよいよ光って立つたのです。

北十字とプリオシン海岸

「あつかさんは、ぼくをゆるして下さる方だろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思ひ切つたといふやうに、
少しどもりながら、~~きき~~ききさんで云ひました。

ジヨバンニは、

「このちりのやつに
見えろ」

「あゝ、さうだ、ぼくのあつかさんは、あの遠い橙い
ろの三角標のあたりにゐらっしゃって、いまぼくのこと
を考へてゐるんをうた。」と思ひながら、ぼんやりして
だまっておました。

(36)
25

「ぼくはあつかさんが、ほんたうに奉になるなら、どん
なことでもする。けれども、いったいどんなことが、あ
つかさんのいちばんの奉なんからう。カムパネルラは、
なんをか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐる
やうでした。

(なんにもいひことなり)

「ま、みのおつかさんは、~~ちやないの~~ちやないの。ジヨバン
ニはびっくりして叫びました。

「ぼくねからない。けれども、誰をって、ほんたうにい
いことをしたら、いちばん奉なんだねえ。だから、あつ
かさんは、ぼくをゆるして下さると思ふ。カムパネルラ
は、なにかほんたうに決ましてゐるやうに見えました。
俄かに、車のなかで、はっと白く明るくなりました。

見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派な
ちあつめたやうな、~~きき~~ききらびやかな~~きき~~の上を

しろの方に見えましたが、ちきもうあうつと遠くの小さく
 繪のやうになつてしまひ、またすゝきがやめやめ鳴つて
 たうたうすつかり見えなくなつてしまひました。ジヨバ
 ンニのきうしろには、いつから乗つてゐたのが、せいの
 高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん
 圓な顔の腫を、しつと~~き~~まつちぐはせ落し、また何かことばか
 聲かが、そつちから傳はつて来るのを
 度々で聞いてゐるといふやうに見えました。旅人たちは
 しづかに席に戻り、二人も胸いつぱいのかなしみに伏た
 新らしい氣持ちを、何氣なくちがつた語で、そつと談し
 合つたのです。

「もうちき、日鳥の停車場をぬえ。」

「あゝ、十一時かつきりには着くんかよ。」
 「早くも、ミグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、
 ちらつと窓のやとを過す、それから硫黄のほのほのやう
 なくらいぼんやりした轉つ機の前をあかりが窓の下を
 通り、汽車はかんかんゆるやかになつて、間もなくフラ
 ットホームの一路の電燈が、うつくしく規則正しくあら
 はれ、それがかんかん大きくなつてひろがって、二人は
 下度、日鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。
 さゆやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがね
 の二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは
 一ぱんに下りて、車室の中はがらんとなくなつてしまひまし
 た。」

しろの方に見えましたが、ちきもうあうつと遠くの小さく
 繪のやうになつてしまひ、またすゝきがやめやめ鳴つて
 たうたうすつかり見えなくなつてしまひました。ジヨバ
 ンニのまうしろには、いつから乗つてゐたのか、せいの
 高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん
 圓な顔の腫を、しつと~~まっくらに~~ ^{まっくらに}落し、
 聲かが、そつちから傳はつて来るのを
 度々で聞いてゐるといふやうに見えました。旅人たちは
 しづかに席に戻り、二人も胸いつぱいのかなしみに伏た
 新らしい氣持ちを、何氣なくちがつた語で、そつと談し
 合つたのです。

「もうちき、日鳥の停車場をぬえ。」

「あゝ、十一時かつきりには着くんかよ。」
 「早くも、ミグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、
 ちらつと窓のやとを過す、それから硫黄のほのほのやう
 なくらいぼんやりした轉つて機の前をあかりが窓の下を
 通り、汽車はかんかんゆるやかになつて、間もなくフラ
 ットホームの一路の電燈が、うつくしく規則正しくあら
 はれ、それがかんかん大きくなつてひろがって、二人は
 下度、日鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。
 さゆやか秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがね
 の二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは
 一ぱんに下りて、車室の中はがらんとなくなつてしまひまし
 た。」

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。
 「ぼくたちも降りて身やうか。」ジヨバンニが云ひました。
 「降りやう。」二人は一度にはねあがってドヤと飛び出し
 て改札口へかけて行きました。ところが改札口には明る
 い電気がかつた電燈が、一つ黙いてゐるばかり。誰も居ま
 せんでした。そこで二人はさへ見ても、驛長や市帽らしい人の
 影もなかつたのです。

二人は、停車場の前の水晶細工のやうに見える銀杏の
 木に囲まれた、小土倉廣場に出ました。そこから幅の廣
 いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通つてゐました。
 土基に降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人も見
 えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行

きますと、二人の影は、ちやうど四方に窓のある室の中
 の、二本の柱の影のやうに、また二つの車輪の影のやうに、
 輻のやうに幾本も幾本も四方へ出るのでした。そして間
 もなく、あの汽車から見ええをまねいた河原に來ました。
 カムパネルラは、そのきれいな砂を、一まみ、掌にひろ
 げ、指でまじきしきしせながら、夢のやうに云つてゐるの
 でした。

「この砂みんな花火を燃やした中から土を火が燃えてゐるよ。
 みんな水晶をよ。すきとほるんだよ。大方鍾乳結晶し
 てゐるをよ。」とどこでぼくは、そんなことを習つたらうと
 思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答へてゐました。

河原の砂は、みんなすきとほつて、方しかに水晶や黄

玉や、まなくしゃくしゃの激曲をあらはしたのや、また
稜から霧のやうな青白い光を出す鑛玉やらでした。ジヨ
バシニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしまし
た。けれどもあやしいその銀河の水は、酸素よりもまを
賢く、水素よりももっとすきとほつてゐたのです。それ
でも方しかに流れてゐたことは、二人の手首の水にひた
つたところが、少し水銀いろに輝いたやうに見える、その手
首にぶつつかつてゐたのは、うつくしい燐光をあけて
ちらちらと燃えるやうに見えるのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいつぱいに生えてゐる岸
の下に、白い岩が、まるで運動場のやうに平らに川に
沿つて出てゐるのでした。そこに小さな五六人のかげ
が、何か掘り出さか埋めるかしてゐるらしく、立つたり
屈んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光つたりしま
した。

「行つてみやう。」二人は、まるで一度に叫んで、そつち
の方へ走りました。その白い岩になつた穴の入口に、
「フリオシン海岸」といふ、瀬戸物のつるつるした標木
が立つて、向ふの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干
も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。
「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議さ
うに立ちどまつて、岩から黒い細長いすきの尖つたくさ
みの実のやうなものをひろひました。
「くるみの實だよ。」と、いふ、沢山ある。流れて來たんぢや

ない。岩の中に入ってるんた。

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいらんてない。」

「早くあそこへ行つて見やう。きつと何か掘ってるから。」
二人は、~~サカ~~ヤギの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近づいて行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のやうに燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や月殻でこさえたやうなすすきの櫛がゆれたのです。

かんかん近づいて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた學者らしい人が、手帳に何かせわしうに書きつけながら、
 つるはしをふりあげて

り、スコップをつかつたりしてゐる。三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ描圖をしてゐました。

「うそのその突起を壊さないやうに、スコップを使ひたまへ、スコップを。あつと、もう少し遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、ほんたうに、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたといふ風になつて、半分以上掘り出されてゐました。そして氣をつけて見ると、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番そうがつけられてありました。

「君たちは何を観かぬ。」その大學士らしい人が、眼鏡をき

「橋を渡るんですか。し
うりや、橋を渡るにはあるんだ。」

(42)
31

らつとさせて、こつちを見て話しかけました。「くるみが
沢山あつたらう。それはまあ、ちつと百二十萬年ぐらゐ
前のくるみを。よく新らしい方さ。ここは百二十萬年
前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝が
のも出る。いま川の流れてゐるところに、やつくり塩水が
寄せたり引いたりもしてゐたのだ。このけものかね、こ
れはボスといつてね、おいおい、うてつるはしは
ふしたまへ。ていねいに~~おぼろげな~~盤でやつてくれたま
へ。ポストいつてね、いまの牛の先祖で、よくありふ
れたもれす。けれども、ぼくの考へてゐるのはやんなこと
でない。ぼくらからみると、ここが厚い立派な地層で、
百二十萬年ぐらゐ前にゐたといふ證據もいろいろあ
るけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやつぱり
こんな地層に見えるかどうか、あるひは風~~を~~か水や
がのんとし方空かに見えるやしないかといふことなのだ。
わかつたかい。けれども、おいおい、~~さういふ~~さうもス
ーッではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてゐる
ぢやないか。大学士はあはてゝ走って行きました。
「もう時間だ。行かう。カムパレルが地図と腕時計
とをくらべながら云ひました。」

「ああ、ではわたくしもは失礼いたします。」ジヨバ
ンは、ていねいに大学士にあやしました。
「さうですか。いや、さうなら。大学士は、またにかし
さうに、あちこち歩きまはつて~~は~~證據をはいめました。」

二人は、その白い岩の土を、一生けん命汽車にあくせを
いやうに走りました。そしてほんとうに、風のやうに走
れたのです。息も切れが膝もあつくをりませんでした。
こんなにしてかけるなら、もう世界中をうたてかけれる
と、ジョバンニは思ひました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈が
たんと大きくなつて、間もなく二人は、もとの車室の
席に座つて、いま行つて来た方で、窓から見ておました。

鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切さうな、大人の聲が、二人のうしろで聞えました。

それは、希いもの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾をつつんを荷物と、二つに分けて肩に掛けた、赤髭のせなかのかかんた人でした。

「えい、いーんです。」 ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑みながら、荷物をゆっくり細棚にのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいやうなかなしいやうな気がして、

をまっつて正面の時計を見ておましたら、かうつと前の方で、硝子の笛のやうなものが鳴りました。汽車はもう、しづかにうごいてゐたのです。カムパネルは、車室の天井を、あちこち見ておました。その黒い瞳は、十二の列の小さな電燈を一つずつ走り、赤ひげの人は、なにかなつかしさうにわらひながら、ジョバンニやカムパネルのやうすを見ておました。汽車はもうをんをん早くなつて、すすきと川と、かはるかはる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおつおつしながら、二人に訊きました。

「あなた方はどちらへ入らっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。ジョバンニは、少しきまり悪
そうに答へました。」

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまでも
行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。カムパネルラが、いき
なり、喧嘩のやうにたづねましたので、ジョバンニは、
思はずにうひました。すると、向ふの席に居た、尖った
帽子をかぶり、大きな鍔を腰に下げた人も、ちらつとこ
ろちを見てうひましたので、カムパネルラも、つい
顔を赤くして笑ひをしてしまひました。ところがその人
は別に怒つたでもなく、頬をびくびくし、^{あがり}夜事しました。
「わっしはあぐさで降ります。わっしは、鳥さつかま

へる商賣だね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。うぎも白鳥です。」

「鶴はたくさんおますか。」

「居ますとも、さっきから鳴いてますあ。聞かなかつた
のですか。」

「いえ。」

「いまも聞えるぢやありませんか。うう、百をすまし
て競いてるんなさい。」

二人は眼を睨み、目をすましました。ひとりと鳴る
汽車のひびきと、すすまの風との間から、ころんころん
と水の湧くやうな音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジヨバンニは、どっちでもいいと思ひながら

答へました。

「どいつはな、雑作ない。ナギといふものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼあつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待ってゐて、鷺がみんな脚をかういふ風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押へちまふんです。するともう鷺は、かたまつて安んじて死んぢまひます。あとはもう、わかり切ってますあ。押し葉にするわけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本ぢやありません。みんなたべるぢやありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありますんや。さら、その男は立つて、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。さあ、乙らんない。いまとつて来たばかりです。」

「ほんたうに鷺だねえ。」二人は思はず叫びました。まっ

白な、あのさっきの山の十字架のやうに光る鷺のからだが、十ばかり、少しひらべつたくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のやうにならんでゐたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でさつと、鷺

の三日月が左の白い瞼に眼にさわりました。頭の上の
横のやうな白い毛もちゃんとついておました。

「ほ、さうでせう。鳥捕りは風を敷を重ねて、またくる
くると包んで廻りくりました。誰がいつたいこのらで
鷺をんぞ喰べるからうとジョバンニは思ひながら訊きま
した。

「鷺はおいしいんですか。」

「えい、毎日注文があります。しかし雁の方が、もっと
賣れます。雁の方がずっと柄がよいし、第一手数があり
ませんからだ。さう、鳥捕りは、また別の方の包みを
解きました。オースと青と青じろとまたらになつて、なめ
かのおかりのやうにひかる雁が、ちやうどさっきの鷺の
やうに、ぐちばしを揃へて、少し扁べつたくなつて、なら
んでおました。

「こつちはすぐ喰べられます。とうです、少しあまがり
なさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりま
した。するとそれは、キョコレートでもできてゐるや
うに、すつときれいにとれたのだ。

「とうです。すこしたべてゐるなさい。鳥捕りは、そ
れを二つにちぎつてゆきました。ジョバンニは、ちよ
つと喰べてみて、「なんぞ、やっぱりといつはあま子を
キョコレートより、もっとおいしいけれど、こんな雁が
雁んでゐるもんか。この男は、どこかこれらの野原の菓
子屋を、けれどもほくは、このひとをばかにしながら、

この人のお菓子を食べてゐるのは、大へん氣の毒だ。」と
おもひながら、やっぱりぼくぼくそれを食べてゐました。
「もう少しあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しまし
た。ジョバンニは、もっと食べ方かったのですね、鳥捕り
「えい、ありがたう。」と云つて遠慮しましたら、鳥捕り
は、「こんどは向ふの席の、鍔もった人に出しました。
「いや、商賣ものを貰つちやすみませんな。」その人は、
帽子をとりました。

「いゝえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥
の景氣は。」

「いや、すつきなもんですよ。一昨日の第二限ころなん
か、なぜ燈台の灯が、規則以外に間、させるかつて、あ
つちからもこつちからも、電話で故障が來ましたが、な
あに、こつちがやるんぢやなくて、渡り鳥もが、まっ
黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方あり
ませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、あれ
のとこへ持つて來たつては方がねえや、ばさはそのマン
トを着て脚と口との、途方もなく細い大將へやれつて
斯う云つてやりましたがね、はっは。
すすきがなくなつたために、向ふの野原から、ぱつと
あかりが射して來ました。

「鷺の方はなぜ手数をなですか。」カムパネルラは、ヤ、つ
まから、部かうと思つてゐたのです。

「それはね、鷺を喰へるには、鳥捕りは、こつちに向き

直りました。天の川の氷あかりに十日まつるして置くか
ね、さうをなけあ、砂に三四日うつめなけあいけない
だ。さうすると水銀がみんを蒸発して、喰べられるやう
になるよ。

「こいつは鳥ぢやない。たゞのお菓子でせう。やつぱり
あないことを考へてゐたとみえて、カムパネんうが、思
ひ切つたといふやうに、尋ねました、鳥捕りは何か大へ
んあわてた風で、

「さうさう、ここで降りなけあ。」と云ひながら、立つて
荷物をとつたと思ふと、もう見えなくなつてゐました。

「こへ行つたんならう。」二人は顔を更合せましたら、
燈臺守は、にやにや笑つて、少し伸びあがるやうにし

ながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もやつ
ちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、黄いろと青じ
ろの、うつくしい燐光を出さ、いちめんのかはらははこ
ぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手をひろげて、
「いっとさらを見てゐたのです。」

「あそこへ行つて。おるぶん奇体をぬえ。まっとまた
鳥をつかまへるとをぬえ。汽車が走つて行かないうち
に、早く鳥がゐるといふな。」と云つた途端、がらんと
した結構いろの空から、さつき見たやうな鳥が、まるで
雪の降るやうに、きやあぢやあ叫びながら、いつぱいに
舞ひおきて來ました。するとあの鳥捕りは、すつかり注
文通りだといふやうにほくほくして、西足さかつきり

方十度に開いて立^つつて、鷺のちぢめて降りて来る黒い
 脚を両手で片^つ端から押へて、布の袋の中に入れるので
 した。すると鷺は、鷺のやうに袋の中で^多しばらく青く
 へかへか光ったり消えたりしておましたが、おしまひた
 うたう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでし
 た。ところが、つかまへられる鳥よりは、つかまへられ
 ないで無事に天の川の川の砂の上に降りるものの方が多かつ
 たのです。それは身である、足が砂へつくや否や、ま
 るで雪の融けるやうに縮まって扁べつたくなって、間も
 なく溶^と釜^かから出た銅の汁のやうに、砂や砂利の上にひ
 ろがり、しばらくは鳥の形が、砂についてゐるのでした
 が、それも二三度明るくなつたり暗くなつたりしてゐる
 うちに、もうすっかりまはりと同じいろになつてしまふ
 のでした。

鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまふと、急に両手
 をあげて、矢隙が鉄砲弾にあつて、死ぬときのやうな
 形をしました。と思つたら、もうそこは鳥捕りの形は
 なくなつて、却つて、

あいせいせいした。どうもからかに^{ほど}冷度合ふ^{ほど}
 穢いであるくらゐ、いいことはありません。といふま
 きおぼえのある聲が、ジヨバンニの隣りにしました。見
 ると鳥捕りは、もうそこでとつて來方^き鷺を、きちんそ
 う^へて、一つづつ重ね直してゐるのでした。

どうしてあまごから、いつ^もペンにこゝへ來たんです

か。ジヨバンニが、なんかあたりにまへのやうな、あた
りまへでないやうな、おかしな氣がして問ひました。
「どうしてつて、まうなつてゐるから仕方ないぢやありま
せんか。せんたいあなた方は、どちらからおいでですか。
ジヨバンニは、すぐ返事しやうと思ひましたけれども、
まあ、せんたいとてから来たのか、もうどうしても考へ
つきませんでした。カムパネルうも、顔をまっ赤にして
何か思ひ出さうとしてゐるのでした。
「あ、遠くからですね。鳥捕りは、わかつたといふや
うに雑作なうなりました。」

ジョバンニの切符

「もうこゝろは白鳥のあしまひです。こゝろなさい、あれが各高いアルゼシオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるやうな青寶玉と黄玉の大きな二つのすきとぼった球が、~~車輪~~輪になってしずかにくるくるとまはってゐました。黄いろのがかんかん向ふへまはって行って、青い小さいのがこつちへ進んで来間もなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな両面凸レンズのかたちをつくり、~~物~~それもかんかん、緑いろの

まん中がふくらみ出して、たうたう青いのは、すつかりトパースの正面に來ましたので、線の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまたかんかん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰り返して、たうたうすつとはなれて、サファイアは向ふへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、また丁度さつきのやうな風になりました。銀河の、かたちもなく青もない水にかこまれて、ほんたうにうの黒い測候所が、駐つてゐるやうに、しづかにゐる方はうたのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……鳥捕りが云ひかけたとさ、
「切符を拜見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子を

かぶつ左せいの高い車掌が、いつか三人の席の、横にま
つぎに立つてゐて云ひました。鳥捕りは、をまつてか
くしから、小さな紐きんを出しました。車掌はちよつと
見て、すぐ眼をうらして、(あなたの方のはて)といふや
うに、指さうぶかしながら、手をジヨバンニたちの方へ
出しました。

「あ、」ジヨバンニは困つて、もぢもぢしてゐました
ら、カムパネルうは、わけもないといふ風で、小さな用
いろの切符を出しました。ジヨバンニは、さうかりあ
はててしまつて、もしか上着のおケリトにでも、入つて
ゐるかとおもひながら、手を入れて見ましたら、何か大
きな聲が紐きんにあらりました。あんなもの入つて
ゐるうかと思つて、急いで出してみましたが、

「さあ、」ジヨバンニは困った。
見ました。カムパネルうももちましてたしかに持った
のをいやうでした。(あゝ、殊によ、たう僕が二人の
持つてゐたかも知れない。)と思ひながらジヨバンニが上
着のかくしに手を入れて見ましたら、何か大まな響んた
紙きれにあたりました。こんなもの入つてゐたらうかと
思つてあけて、出して見ましたらそれは四つに折つたは
いけむぐらぬの大さの紙いろの紙でした。車掌が手を出
してゐるもんです。から何でも構はない、やつちまへと思
つて渡しましたら、車掌はまづぐに立ち直つて「丁寧に
それを開いて見てみました。そして読みながら上着のば
らんやなにかしきりに直したりしてゐましたから、」ジヨ

バンニはたしかにそれは證明書が何かかつたところへつ
し胸が熱くなるやうな気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。車
掌がたづねました。

「何かわかりません。もう大丈夫だと安心しながらシ

ヨバンニはうつつと見えあげてくつくつと笑ひました。

「よろしうございます。南十字星へ着きますのは、次の第

二時ごろになります。車掌はきりや紙をジヨバンニに

渡して向ふへ行きました。

カムパネルうは、その紙切れが何かつたか待ち兼ねた
といふやうに息いでのやまこみました。ジヨバンニも全
く早く見た加つたのです。ところがそれはいちめん黒い

二の持つてゐるものでも、食べるものでも、呑んでしまひたい。もうこの人のほんたうの奉になるを、自分があの光る天の川の河原に立つて百年ついでに立つて鳥をとつてやつてもいいといふやうな氣がして、どうしてともう黙つてゐられなくなりました。ほんたうにあなたのはしいものは一体何ですか、と訊かうとして、それではあんまり出し抜けをから、~~鶴の傳書~~をさうして、とまを渡し、掛けやうと考へて、振り返つて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ません。網棚の上には白い荷物も見えなかつたのです。また窓の外を足ふんばつて、そのを見上げて、驚き揺る度としてゐるのかと思つて、急いでさうちを見ましたが、外はいち

めんのうつくしい砂子と、向き岸の白いすゝきの波ばかり。あの鳥捕りの慶いせなかも、失つた帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらうか。カムパネルラもほんやりさう云つてゐました。」

「どこへ行つたらうか。一体どこでまたあふれをらう。」

僕はどうしても少しあの人に、~~何を言は~~なかつたらう。

「あゝ、僕もさう思つてゐるよ。」

僕はあの人が邪魔なやうな氣がしたんだ。それから僕は太へんつらい。ジヨバンニはこんなを變つてを氣もちば、ほんたうにはじめてを、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

御おめけをか

お月うしきうつる白あへ

ライツヴィが一つ船で来ましてたけぬも我々にはは
たなまかたのたけぬ。 船は一生けん命で甲板の格子に

つたどてはたして、おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

ふほど熱練おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

みななのおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

いままで忘れておれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

あ、おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

は、その氷山の流れる上のはての海で、山を船に乗っ
て、風や来りつく潮水や、おれなそれとてり(千ました)け

おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

おれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け
れどもおれなそれとてり(千ました)け

けしとあるうかきいらいするおならもいふはもうありませぬ。
しむあり
おなにか
みんをさ
さかつか
いふは
おなにか
しむあり
おなにか

ねしながら左しためるやうに立ちました。
「ちやうと一つづつあるね。」姉はううちへ渡
してそれから向ふの小さな妹にさひました。それをおな
ふ。男の子はまるで飛びつくやうにさしてその大きな蘋果
にかかりついてゐました。あれまた大きいので中々その
白い冷たいような肉が噛みとれないで汁がぽとぽと落ちま
した。

「先生、蘋果でかいましたね。」姉はうしろ向きになつて
はなし込んでおなを向ひのおの黒服の青年にあしきひの二
つのうち一つを出しました。

「おや、どこから来たの。」立派ですわね。さういふでは
んを蘋果ができるのかしら。青年は手にもつてまるで

びっくりしてしまつたやうにいろいろに場處を變へたり
目細くしたりして眺めてゐました。みんなはいつか

ギョパンニは僕はもういふふ蘋果を百もたつてお
るとおなひました。みんなはナイフで皮をむいてはみま
した。それはおなにかに刺さるやうな感じがして、おな

のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな
のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな
のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな
のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな

のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな
のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな
のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな
のせをあらうのにはおなにかはまる。おなにかはまる。おな

「ご、ごよ。」 カムバネルうは、驚の停車場の少し南を指さしました。

「驚の停車場もう過ぎたの。」

「過ぎた。さっきあの人船のはなししてゐた時を。」

男の子がてしかけの上に大威張り立ってゐました。そしてジヨバンニの向ふの窓をのぞいて呼びました。

「あまの川、

●庭のすなごも見え、へるぞ

かはらの石も見え、へるぞ。

いつまで見ても、

見えないものは水ばかり。

見ました。その景色の立派なところ、疎り川下の向ふ岸に

青く茂った大きな林が見え、その枝々は熱してまつ葉に光る円い実がいつぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラバルやジロフオンにまがって何とも云へがきれいな音いろが、どけるやうに浸みるやうな風にたれて流れて来るのをした。

青年はぐくつとしてからをさふるふやうにしました。

かまつてその譜を聞いてゐると、そこからいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原が敷物かいひろがり、またまつ白を臘のやうな露が太陽の面を擦りめて行くやうに見はれました。

「まあ、あの鳥。」

カムバネルうのとまじりの加ふるどやめをあげる、カムバネルうのとまじりの女の子が叫びました。

からすやない。かささぎを。カムパネルが何気なく叱るやうに叫びましたので、ジヨバンニはまた河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたぐさんてくさんいつぱいに列になつてとまつてちつと川の微光を受けつゐるのをした。

「かささぎですわえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年は誰かとをなし云ひました。

向ふの青い森の中の三角標はすつかり汽車の正面に来ました。そして譜がけはかれあの置きなれた主よみとての歌にかはつたのです。青年は十二つと顔いろが青々めいちはん太き市はまたハンケチを顔にあてました。や

れがすぐとなりのおさな妹は傳はつたもんぢですから、ジヨバンニまで何かか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌ひ出されたんたんはつきり強くなりました。思はかジヨバンニもカムパネルうも一語にうたひ出したのです。

「まふみもとにちかつかん
のぼるみちは十字架に

ありともなごかなしまべき
まふみもとにちかつかん

男の子もまるで数合にみえぬるやうに一生けん命にうたひました。そのうつくしいまよまの語の讀美歌は見えな天の川の氷を吹いて来る風をふるはせ、廣い銀

九天王

とておとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

いす。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

は。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

行くときはその山土あ。二にその火はちやうと。おぼろもするやうに

おぼろもするやうに。おぼろもするやうに。おぼろもするやうに

さつ。そのおとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

るのかそれと。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

たのか。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

二人おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

あの土。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

の。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

つ。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

ある。おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

おとす。こつと申勝おはれがります。すれどこへ行く御ぼらしく

ふたつた一つのぼろをうのその切符と改してあまけ

あまのやちくしてしけたいしあのとこのやちくかしんと

はあといふはあのとこのやちくかしんとあまのやちく

はあといふはあのとこのやちくかしんとあまのやちく

はあといふはあのとこのやちくかしんとあまのやちく

るつと申すまゐる。

つありかちう。私は大へんいゝ実をうした。おけこんなして

かゝる切符で遠くから物々をうける。言をうける。言をうける。

さういふへてゐた。お前のうへにうける。お前のうへにうける。

とつある。土あ帰つておやすみ。お前は其のうへに

決ふしとほりまゐる。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

お前のあまのやちく。お前は其のうへに

その歌らしいやうなものがあつた。うゝとした。
おまへは 狂人の名をかきうつと田舎へ落つてゐてまゐる
わろけをこころけしてゐる。

カハハネルウの音んやり出すこと
カハハネルウの死に面すること

カハハネルウが死に面するはんと
思ふ。

おひねり

少母とひひやひひのこころを

思ふ衣の一歴更ふかあやしい一歴更のすゝめと示す。

まがきまつ 羽子にね ち 用船音あふあひの経緯とく。

まがき 白衣のひととあひひついでかゝる。

いふはるに重中は一入 経る。 勝

岡崎 功成りない 美敷人は ねしに世が力 現はれる。

No.

No.